

## ティーチングポートフォリオ

短期大学部食物栄養学専攻  
特任教授 永沼 孝子

### 1. 教育の責任

短期大学部食物栄養学専攻は栄養士養成課程であり、教養及び基礎学力を身につけるとともに、栄養士の養成を目的とし食分野において貢献できる人材の育成を実施している。この中において、私は専門分野の栄養と健康に関する基礎科目を担当しており、内容は主に講義と実験である。以下に担当科目を示す。

授業科目	学年	単位数	形態	必・選
食品学	1年前期	2	講義	必修
栄養学Ⅰ	1年前期	2	講義	必修
栄養学Ⅱ	1年後期	2	講義	栄養士必修
ライフステージ栄養学	1年後期	2	講義	必修
食品学実験Ⅰ	1年前期	1	実験	必修
食品学実験Ⅱ	1年後期	1	実験	栄養士必修
食品機能学	2年後期	2	講義	選択
栄養学実験	2年後期	1	実験	栄養士必修

このほか、栄養士実力認定試験に向けた学習を行う特別演習(選択科目)をオムニバス形式で全30回(2単位)のうち14回を担当した。内容は主に過去問題の解答と解説、模擬試験であった。

また、4年制大学(生活文化大学健康栄養学専攻)への編入学希望者に対して勉強会を実施した。2022年度は14回、2023年度は7回実施。内容は講義と練習問題、過去問題の解答と解説。

### 2. 教育理念

食物栄養学専攻では、栄養士の養成を主な目標とし、食の分野で活躍できる人材の育成をめざした教育課程を編成している。到達目標は、栄養士として自立し、活躍できる人材を育てることにあるが、それとともに人間性を育成することも念頭におく。

そのために、まず栄養士として社会に貢献できるような基礎的な学習能力・知識と社会人としての豊かな教養を身につけること、栄養士に必要な専門知識・技術と、食分野における幅広い知識を身につけることが必須である。また、栄養士として指導力を発揮できる実践力・コミュニケーション能力を養うことを目指す。併せて、集団の中での学習を通して周囲への気遣い、協調性、適応力を養う。

そして、栄養士として自立した際には基準や法令を遵守し、安全でおいしい食事を提供する力や、社会人として生きていく中で、倫理観・責任感をもつことができる人材育成を目指している。

### 3. 教育の方法

栄養・栄養素についての基礎知識を確実に理解させることを目的とし、出来る限り丁寧に授業を進める。解りやすい言葉で解説し、必要に応じて映像を使用して理解を深める工夫をしている。

各講義科目については科目によって方法が異なる。

栄養学の授業は主として板書によって進める。本来、「書く」という行動が知識を吸収する目的にとって最も効果があると考えているからである。教科書をもとに解説と板書によって授業を進め、15回の授業の中で一回中間試験を行っている。

食品学、ライフステージ栄養学、食品機能学は伝達量が多く板書は時間的に無理と判断し、教科書と自作の資料を使用している。その他、データや図についてはパワーポイント等の映写手段を用いて理解しやすいように解説している。ライフステージ栄養学では毎回小テストを実施。

食品機能学（選択科目）では、知識の蓄積を求めるのみならず、応用力を養うことも目的としている。文章力の向上を目的として小論文を作成する時間、またアクティブラーニングとして、食品機能に関する課題についてのプレゼンテーションを行っている。これにより、内容をまとめる力、コミュニケーション力の向上が期待される。

講義系に関しては、学生の知識習得を確認するために期末試験を実施している。

実験授業に関しては、題材を身近なものから選択、特に食品を使用した実験を心がけている。これにより食品と化学、調理と化学反応について理解できることを期待する。また、作業を通して周囲とのコミュニケーション力、協調性の向上も期待される。実験の結果は報告書の形で学生に復習させる。

### 4. 教育の成果

担当科目について、2022年度に実施した授業アンケートの結果を以下に示す。

科目	受講者数	回答数	解答率(%)	総合評価
食品学	34	30	88.2	4.38
栄養学I	34	30	88.2	4.31
栄養学II	35	30	85.7	4.57
ライフステージ栄養学	34	29	85.3	4.59
食品学実験I	35	32	91.4	4.33
食品学実験II	34	29	85.3	4.78
食品機能学	10	8	80	4.95
栄養学実験	22	21	95.5	4.94

ほぼ必須・栄養士必修科目であるが、一定の評価を得たものとする。総じて実験の科目は評価が高いが、これは聴講するだけの科目より楽しんで受講できることによると考えられる。栄養学は内容がやや難解な科目であり、評価が低い。

この他、栄養士実力認定試験に向けた特別演習については2022年度の受験者17名のうちA評価が7名であった。複数科目が出題される試験であるが、目指す数字よりもかなり低い値となっている。他の担当者とも相談の上、指導内容の見直しが必要である。

4年制大学への編入試験を目指す勉強会の成果としては、2022年度（2023年度入学）は3名受験して3名合格した。講義のほか学生の要望に従って練習問題などを作成した。全員合格したので、効果はあったと判断できる。

## 5. 教育の改善と目標

授業評価は低くないが、期末試験等の結果では著しく成績が低い学生も見られる。

授業や質問等で一定の理解が可能な学生については、これまで同様に授業を進め、さらに理解が十分でない部分については積極的に質問ができる環境を作る。成績不振の学生には、補習や練習問題、課題などを通じて理解度を上げるように努力する。

実験系の科目については、化学の知識と実生活（調理）が結びつくように教材を選び、化学に興味を持たせるよう工夫する。

最終的に目指すところは、技術のみでなく専門知識、常識、豊かな人間性を身につけた栄養士を養成することである。また、実験やアクティブラーニングを通じてコミュニケーション力と協調性、人への気遣いを身につけることを目標とする。